

# 近代日本における“郷土意識”と社会的統合についての覚書き

—そのかたちと先行研究の整理—

## Memorandum about Regional Patriotism in Modern Japan and the Social Integration—Its Phase and the Framework for Research

岡田 洋司 Youji OKADA

### 概 要

“郷土意識”は、近代日本社会で一般的に見られる心性である。しかし、それは自然発生的なものではないし、ニュートラルなものでもない。郷土意識は地域社会において、社会的統合の原理や情緒として機能するだけにとどまらず、“国家”＝ナショナリズムへも連繋する政治的側面をもつ意識・心性である。

本稿は、そうした郷土意識についての先行研究を整理しながら、近代日本における郷土意識のかたちを概観し、論点を提起することを意図したものである。具体的には、前提として近世から明治期にかけての地域の歴史意識を検討した羽賀祥二の研究を取り上げたうえで、とくに日露戦後の各種紀年祭や史蹟顕彰をとりあげた高木博志の研究、また同じく史蹟顕彰についての住友陽文等の研究を紹介・検討した。さらに筆者の知見・見解を加え、明治期から昭和前期の郷土意識のかたちを描き出した。そして、①郷土意識概念を精密化すること、②従来、天皇制との関連で論じられてきた国家との連繋を「大国化」という契機との関連で検討すること、③国家とリンクしない郷土意識の可能性を検討することを提起した。

### キーワード

近代日本	Modern Japan
国民国家	Nation State
郷土意識	Regional Patriotism
社会的統合	Social Integration
郷土誌	Heinmarktunde

### はじめに

一般論で言えば、人びとは自分自身の生存・生活の“場”、言葉をかえれば地域社会に対して正負が混り合った複合的な意識をもつ。その場合、そうした生存・生活の場としての地域社会を、それに対する愛情・愛着を軸に抽象化したのが“郷土”であり、それに対して生じる意識の総体を“郷土意識”と呼ぶことができよう\*<sup>1</sup>。

郷土意識は、日常そのものなかで生成され、存在を確立するが、たとえば郷土誌や史蹟をめぐる意識のなかにも存在している。あるいは文学作品や民謡のなかにも存在している。また、そうした意識はさまざまなかたちで展開していく。郷土という言葉のなかには、地域社会という場において生活する個々人のアイデンティティをもとめる志向が認められる

が、それだけにはとどまらない。そのなかにある意識は、近代日本において地方社会・地域社会が疎外状況にあるという事情のもとで、ある種の自己回復の志向もちつつ、たとえば“負”の意識や批判的視点で排除した“郷土愛”としてやや角をたてていく。そして、全体的に言えば郷土意識、あるいは郷土愛は、地域社会のなかでの社会的統合の論理や情緒としても機能していった。

郷土意識、とりわけ郷土愛が社会的統合の原理として機能したものとしては、さまざまな例がありうる。日露戦後から第一次世界大戦期にかけて行われた旧藩主の顕彰事業、第一次世界大戦後の「大東京」「大大阪」などに示される都市アイデンティティ、1930年代における農山漁村経済更生運動や郷土教育等々である。しかも、この意識は、地域社会内部

にとどまらず、とりわけ郷土愛は“愛国心”—国民国家のイデオロギー—とリンクし、その基礎をなすものとして位置づけられていった。その意味で、郷土意識は多くの問題を孕みつつ日本近代の歴史的空間において展開していく意識・心性であった。

本稿は、この郷土意識（というかたちで仮に括る意識）についての先行研究を整理しつつ、郷土意識の存在と機能のかたちを概観し、さらに筆者としての研究の方向を見いだすことを目的とするものである。

## 注

\*1 筆者の関心の所在は、地域・地域社会にまつわる意識・価値観が、とくに国家に連繋し政治的社会的統合原理となることの実態を解明することである。筆者は、最初、“地域意識”という言葉によって問題を整理しようとしたが、一般的過ぎて、問題の所在があいまいになるように思えた。そこで“郷土意識”という言葉であらためて問題を整理しなおしたが、郷土意識という言葉が概念的に充分であるのか、またその言葉で問題を整理できるのかやや心もとない部分もある。その点は今後の課題として考えるが、その意味では本稿は筆者にとっての“覚書き”である。なお、“郷土”については、芳賀登『地方史の思想』（日本放送出版協会、1972年）、「郷土」研究会編『郷土 表象と実践』（嵯峨野書院、2003年）等がその全体像の概観、あるいは多面的なすがたをあつかっており、参考になる。

## I 近代日本における郷土意識の出発点

近代日本における郷土意識という問題を考える場合、その前提をあきらかにしているという意味で、まず参照されなければならないのは羽賀祥二の一連の研究である\*1。

羽賀は、幕末から明治にかけての地域社会—羽賀の著作のサブタイトルを使えば、19世紀日本の地域社会—で、さまざまな史跡や郷土史が作り上げられる過程を分析し、当該の時期の地域社会での「歴史意識」を解明している。羽賀が抽出した地域社会での歴史意識は、当然ながら郷土意識と密接にかかわり、その内実となるものである。

羽賀は、直接的には、幕末から明治期にかけての地域社会での、「歴史的遺蹟と人々との関わり、それが生み出した歴史像の特質を解明すること」\*2、端的に言えば、「十九世紀の家・地域における史蹟探究と歴史的事物の顕彰の意味を問うこと」\*3を目的と

している。そして、羽賀は、桶狭間古戦場・賤ヶ岳古戦場・清洲城記念碑など例に、そこに込められた意味を分析している。その意味は、羽賀の議論をきわめて単純化して言えば、「義」と「礼」に結びついた歴史的事跡の顕彰をはかることによって、地域社会自体、あるいはそこでの人びとの生き方をいわば活性化させようというものであった。

しかし史蹟の多くが封建的支配層の歴史的行動と結びついている以上、そこでの価値はある種の政治性・イデオロギー性を帯びていくことになる。羽賀は、「地誌編纂・史蹟保護・政治知識などの組織化などを通じて、新たな質をもった政治権力の萌芽が成長しつつあり、十九世紀全体を通して政治のあり方が緩やかに変容していった」\*4と言うが、そうした変容しつつある政治の課題は「こうした歴史的物事に対しての人々の感じ方、感覚を共有し、誘導していくこと」\*5であり、それが地誌編・史蹟保護などを通じて行なわれたのであった。

羽賀の研究は、これらの問題＝地域社会における歴史意識の政治性をあきらかにしたものである。そして、それは地域社会の内部のみならず、幕藩制国家であれ、明治国家であれ“国家”にまでつながっていく問題であった。

羽賀の場合は、歴史意識という切り口をとっていた。だが、より直接的に地域を対象化し、それを積極的に肯定する意識も存在していた。たとえば郷友会・在京青年会における郷里に対する意識である\*6。

成田龍一が郷友会としてあつかい、河西英道が在京青年会と呼んでいる組織であるが、1890年代の東京において、郷里を同じくする青年を中心とする人びとが親睦等の目的で設立した団体であった。それらの団体は、彼らが出離した郷里への愛着を軸に結束が図られたものであった。その意味では、郷友会・在京青年会の結合の原理は、その言葉を使うか使わないかは別として郷土意識であり、郷土愛といって差し支えないと思われる。しかし、郷友会・在京青年会のもつ郷土意識は、当然ながらその地域で生活している人びとの意識と言えない。その意味で郷友会・在京青年会の活動のなかにある意識は、成田龍一によれば、彼らが生活している東京という「都市空間における、「都市的なもの」＝「故郷的なもの」という複合的なアイデンティティ」\*7であった。

その都市生活者の郷土意識は、たとえば愛知県三河出身者からなる三河郷友会の論客志賀重昂のなかに見いだすことができよう。たしかに、志賀は、三

河郷友会の東京在住のメンバーとして『三河郷友会雑誌』にいくつかの文章を寄稿しており、そこから志賀の郷土意識を読み取ることは十分に可能である\*<sup>8</sup>。また時代は若干あとになるが志賀の周知の著作『日本風景論』（1894 年）には、米地文夫によれば、志賀の出身地三河についての不自然な比重のかけ方があり、そこに志賀の愛郷心を読み取ることができるという\*<sup>9</sup>。

しかし、現実には問題はもう少し複雑である。たしかに郷友会・在京青年会は、基本的には東京で設立されたものである。しかし、たとえば三河郷友会は、出身地三河にも組織をもち三河在住者が活動を行ったり（そのなかには会としての活動ではないが、額田県再置運動という政治運動まで含まれる）、機

関誌に寄稿したりしている\*<sup>10</sup>。

三河郷友会という筆者が知る一例をあげたにすぎず、慎重な検討が必要であるが、郷友会における郷土意識は、在京者という都市生活者のアイデンティティという面とは別な側面の検討が必要であろう。

とはいえ郷友会・在京青年会の意識は、やはり基本的には郷里から離れた都市生活者の意識であった。

しかし、この時期になると地域の側（少なくとも中央に対する地方の側）においても自分たちの生活・生存の場を郷土という言葉を使って抽象化し、つよくそれを肯定する動きが生まれた。表1は、1880年代から日清戦争後までの時期に発行された、郷土という言葉タイトルの中にもつ著作の一覧である（これ以前には郷土というタイトルをもつ著作は

表1 明治中期の“郷土”をタイトルに含む著作

発行年	著者・編者	著作名	発行者
1883年	静岡県教育会編	学校用静岡県郷土地図	吉見書店
1890年	尋常国田小学校〔横浜〕編	郷土史	同校
1892年	広島秀太郎	小学阿波国史：郷土史談	黒崎精二
	岡本竹二郎 編	東京府郷土史談	栄泉社商店
1893年	三谷福三郎編	郷土史談：小学校生徒用	芸香堂
	小菅松内編	福島県郷土史談	教育書房
	三条同盟編纂所編	新潟県郷土地図 学校用	野島書店
	渡辺盈作・増野介臣編	郷土地理：島根県小学用	川岡清助
	江田重雄編	交野茨田讃良郡〔大阪府〕郷土歴史	井上庄太郎
1894年	斎藤寛次郎	千葉県郷土分図 小学校用	杉市郎平
	法月鋭児	静岡県郷土史談	修誠堂書店
	石川郡〔石川県〕町村立 高等小学校教職員会	郷土誌談	同会
	炬口又郎	兵庫県郷土誌談	吉岡平助支店
	斎藤寛次郎	千葉県郷土地誌	六一堂
	萩井重次編	大阪府郷土誌談	吉岡平助等
	石橋臥波編	広島県郷土誌談	教育書房
1895年	高橋正賢	郷土地理歴史講義録	新々堂
	中村与衛門編	猿島郡西葛飾郡〔茨城県〕郷土誌	教育書房
	平野平太郎	郷土地理史談	兵庫すへ
	宇佐郡〔大分県〕高等小 学校編	郷土地理	阪本様次郎
	埼玉県北埼玉郡小学校 教員講習会編	埼玉県北埼玉郡郷土誌談	尚古堂書店
	松友学館編	埼玉県郷土地誌	三書房
	小野藤太	郷土誌談	杉野竹次
1896年	小嶋虎太郎	洲島小学校〔山形県東置賜郡〕高等一学年郷土 地理歴史	知新堂
	高橋正賢	郷土地理	新々堂
	田沼太右衛門	埼玉県郷土地誌	松友学館
	浦和彦七	郷土地誌及史談	藤田万之助
1897年	塩屋高等小学校〔石川 県江沼郡〕編	郷土地理史談	同校
	錦城尋常高等小学校 〔石川県江沼郡〕編	郷土地理史談	吉本次郎兵衛
	松田鉦三郎	三重県地誌教按	同人
	一戸隆次郎	岩手県郷土誌	吉川半七
	斎藤藤吉編	郷土誌談	同人
	喜多方又十郎	郷土地理歴史	同人
	愛知県渥美郡豊橋町立 高等小学校編	郷土誌	高須広治
	朝陽学校〔山形県鶴岡 町〕	郷土地理史談	同校
	河合卯之助	宇治郡郷土地理史談並管内地理	同人
	渡辺敏編	長野町小史草稿：郷土史料	中村信太郎
	菅羽茂郎	郷土地理	内田与惣松
1898年	北浜尋常高等小学校 〔石川県江沼郡〕	郷土地理史談	同校
	吉田恒三編	若越郷土唱歌	北隆堂
	葛野郡〔京都府〕西院高 等小学校編	京都府葛西郡郷土地理及誌談	郁文堂
	広瀬清七編	郷土の地理歴史並管内地理	同人

註 i 国立国会図書館他の検索によるものであり、かならずしも網羅的ではない。

ii [ ]によって県名・郡名を補った。

見られない)。

基本的には国立国会図書館の検索システムで検索したもの(国会図書館所蔵とは限らない)に、筆者が把握している何点かの著作を加えたもの、という便宜的なリストである<sup>\*11</sup>。しかし、近代日本社会における郷土という言葉の使われ方の端緒を考える一つの材料にはなるだろう。

この表によれば、郷土という言葉タイトルの中にもつ著作は、1890年代になってあらわれかなり一般化したことがわかる<sup>\*12</sup>。また、その場合、これらの著作は、郷土誌・郷土地理というかたちをとっているし、多くは教育と結びついている。

明治初年代から各地で「地誌」と名付けられた地方・地域の歴史書が刊行されていた。『加賀能登地誌提要』(1868年)・『神奈川県地誌略』(1871年)・『岩代磐城国地誌提要』(1873年)といった著作である。そして1874(明治7)年に地理教科書として『日本地誌略』等が発行されると、その前提として、地域の歴史を教授する必要ができた。その結果、そうした地誌の発行はいつそう活発なものとなっていった。さらには、1890年代になるとプロシアのHeimatkunde=郷土誌の考え方が、日本の教育のなかで表面化し、今度は、“郷土誌”をタイトルとする著作がかなり活発に刊行された<sup>\*13</sup>。表1の著作はそうした初期の郷土誌であり、ここにおいて“郷土”という言葉はかなり一般的なものとなったと思われる。

すべてを検証したわけではないが、これらの著作は、その地域の歴史的な流れをごく簡単に概観したり、寺社・古跡・人物等を説明したりするものが大半である。ただ、ある意味ではナイーブなこれらの著作には、すでに一つの確固とした価値観が含まれている。たとえば、広島秀太郎『郷土史談 小学阿波国史』(1892年)は、阿波国=徳島県の歴史を「国造時代の事蹟」からはじまり、明治時代にいたるまでを叙述したものであるが、その基本的な姿勢は、神武天皇から明治天皇にいたるまでの天皇家によって統治されてきた「皇国」という枠組みのなかでの阿波国の動きを記すことであった<sup>\*14</sup>。また、江田重雄編『交野茨田讃良郡郷土歴史』(1893年)は、序文のなかで、「郷土歴史」の目的を次のように説明している。

郷土歴史ハ其郷土有名ナル古蹟及ビ人士ニ就イテ其事実功業ヲ談シ初学者ヲシテ自カラ歴史中ノ人トナリ知ラス識ラス 天皇ノ聖徳ヲ感ゼシ

メ先人ノ偉業ヲ欽慕シ郷土ヲ愛シ国家忠良ノ臣民タランコトヲ欲セシムルニアリ<sup>\*15</sup>

すなわち「郷土歴史」の目的は、郷土の古蹟・人士を知ることによって、自分が時間と空間を共有する“歴史”という共同体のなかに生きているという自覚を促すとともに、天皇の聖徳を感じ、郷土を愛し、かつ国家に対して忠良な臣民を養成することである。ここでは、“皇国”—という言葉でまとめておくが—に対する忠良な臣民であることと、「郷土ヲ愛シ」ということが並列されている。両者の論理的な関係はかならずしも明確とは言えないが、国家忠良の臣民を養成するためが目的であり、郷土の事蹟を知ることはそのための手段である。したがって郷土の人物・古蹟は、たえず天皇の聖徳との関係で位置づけられる=価値化されることになる。郷土の人物・古蹟を皇国というコンテクストのなかに位置づけたことが、この著作の特徴であり、表1の著作の多くの特徴でもあると思われる。

以上のように明治期においては、郷土意識は一面ではアモルフなかたちで現れてきたが他面では、この段階ですでに、国家とリンクする統合原理として機能するような側面をもちながら展開しつつあった。

## 註

\*1 羽賀の一連の論考は、羽賀『史蹟論 19世紀日本の地域社会と歴史意識』(名古屋大学出版会、1998年)にまとめられている。また最近の「郡長田中正幅論」(『豊田市史研究』第3号、2012年3月)もその延長線上にある研究である。

\*2・3 羽賀前掲書3頁。

\*4・5 同前15頁。

\*6 河西「在京青年会の位置と論理」(馬原鉄男・岩井忠熊編『天皇制国家の統合と支配』文理閣、1992年)、成田『「故郷」という物語 都市空間の歴史学』(吉川弘文館、1998年)等。

\*7 成田前掲書151頁。

\*8 この点については、筆者は、「近代日本における国民国家と郷土意識—『三河郷友会雑誌』と三河振興構想」(1)(2)(愛知学泉大学コミュニティ政策研究所『コミュニティ政策研究』第10号・第11号、2008年3月・09年3月)で論じたことがある。

\*9 米地「志賀重昂『日本風景論』と愛郷心・愛国心—中部日本の火山等に関する記載をめぐって—」岩手県立大学総合政策学部『総合政策』第5巻第2号、2004年2月)。

- \*10 前掲、岡田「近代日本における国民国家と郷土意識—『三河郷友会雑誌』と三河振興構想」(1)(2)。あるいは、少しのちに(1897年4月)に設立された尾張郷友会は、「本会ハ本部ヲ名古屋ニ置キ支部ヲ東京及ビ尾張各郡又ハ其他会員十名以上ヲ有スル地ニ置ク」(『尾張郷友会々則』第5条、尾張郷友会『尾張郷友会雑誌』第1号、1897年4月、東京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵)となっており、むしろ名古屋が中心となる組織であった。
- \*11 この検索システムは絶対的なものではなく、実物と照合したところでは刊行年に誤りがあるものが何点かあった。たとえば、1871年の刊行—すなわち“郷土”をタイトルにもつもの—も最初の著作—として記載してあった岡崎富太郎『郷土誌』(広島県山県郡原村立成志尋常小学校)は、広島県立図書館所蔵の実物で確認すると1908年の刊行であった。また、同じく1871年刊行とされる渡辺喜祐『大森郷土史』(渡辺刊)も福島県立図書館の実物は「戊申」という記載で実際は1908年のものであった。
- \*12 なお国立国会図書館の検索システムには、近代以前の著作で郷土という言葉を含むタイトルをもつ著作が何点か現れてくるが、実物で確認したところによれば出版年代は近代になってからのものである。
- \*13 芳賀登『地方史の思想』(日本放送出版協会、1972年)、由谷裕哉・時枝努編『郷土史と近代日本』(角川学芸出版、2010年)。および海後宗臣監修『日本近代教育史事典』(1971年、平凡社)の各項目。なお、明治後期以降の郷土誌については、教育史からの事例研究が多く蓄積されている。
- \*14 とくにそのなかでは、近世において領主であった蜂須賀家の役割が重視されている。
- \*15 「自叙」(江田編『交野茨田讃良郡郷土歴史』)1頁。

## II 郷土意識の国家への連繋—日露戦後の各種紀年祭と地方改良運動

一部、重複しながらも羽賀祥二が対象としている時代より後の時代の問題あつかい、しかも“郷土愛”という概念を明確に使っているのが高木博志の研究である。

高木は、1889(明治22)年から日清・日露戦争後にかけての時期を、「紀年祭の時代」と位置づけている<sup>\*1</sup>。この時期には東京開府三百年祭(1889年8月26日)をきっかけにさまざまなかたちで幕府顕彰や藩祖三百祭が全国の都市で行われたからである。さらに、高木は、平安遷都千百年祭や戊辰戦争五十年

祭もこの流れのなかに位置づけている。あるいは、阿部安成が考察している日露戦後の井伊直弼の顕彰運動もこうした流れのなかに含めることができると思われる<sup>\*2</sup>。

きわめて大ざっぱな言い方をすれば、羽賀が問題にしたさまざまな顕彰の動きは、地域の知識人層や名望家層が行ったものであった。それに対して高木(や阿部)が問題にしている動きは、地域の知識人層や名望家層、あるいは旧藩の藩士会や旧藩主等もかかわっている。しかし、同時に市や県(また明治政府自身)といった行政・政治が、直接的にかかわっている場合もある。すなわちこれらの行事は、地域社会内部の営みにはとどまっていない。しかも、その背景には、明治国家の政治的パラダイム全体の転換があったのである。

高木によれば、これらの旧藩主の顕彰運動が可能になったのは、1889年の大日本帝国憲法の発布にともなう大赦令によって戊辰戦争(また西南戦争)の「和解」が成立したからである(1917年の戊辰戦争五十周年によりそれは完結する)<sup>\*3</sup>。この和解によって「賊軍」「朝敵」であった旧藩主の慰霊・顕彰が可能になったのである。この和解は、明治国家の一体化(それは国民国家の形成・成立に不可欠な政治的前提であった)が完成したことであり、旧藩という地域は、もとは佐幕派であろうが勤皇派であろうが、政治的に等質・等価のものとして位置づけられたということである。そのためいわば誰はばかることなく旧藩主の顕彰が可能になったのである。そして、その各地での藩祖の顕彰等の祈年祭が、郷土愛の覚醒につながっていったということであろう。高木は、それを具体的に金沢・弘前・仙台の三つの都市に即してあきらかにしている。また同時にその郷土意識・郷土愛は、明治国家＝天皇制にかなり直接的なかたちでつながっていったというのが高木の基本的な主張である。高木は日清・日露戦争後の状況を次のように述べる。

地域社会に国家がむきだしであらわれ、農民を武士(兵士)として徴兵し、近代の「武士道」が語られ、国民道徳論が社会を覆う。藩祖の顕彰や藩史の編纂が旧城下町で進み、各藩が「勤皇」であったとの藩史の歴史叙述や皇室とのかわりの顕彰など、地域社会は天皇制との位置どりを模索していく<sup>\*4</sup>。

そして、高木は、「明治前期にはつながりえなかった「郷土愛」と「愛国心」との両者が、二〇世紀に

は連動していく」\*<sup>5</sup>と結論づける。

高木の研究は、郷土意識による社会的統合・政治的統合についての大きな見通しを示すものであり、とくに「郷土愛」と「愛国心」との連動のかたちを考えるうえで、きわめて示唆的である。ただし、「郷土愛」や「愛国心」については、これ以外にさまざまな事例をあげて、その概念を検討すること、あるいは歴史的な形成のかたちを検討することが必要であろう。

また日露戦後の段階になると郷土意識との関係でぜひ考えなければならない問題がある。地方改良運動である\*<sup>6</sup>。

地方改良運動においては、この運動を主導する井上友一等のとくに内務省地方局の官僚たち、あるいは山崎延吉や留岡幸助等民間の（と言ってよいだろう）イデオログたちの言説に郷土という言葉が頻繁に現れているわけではなかった\*<sup>7</sup>。しかし、地方改良運動がさまざまな意味で地域の側における郷土意識（「地域の側における郷土意識」というのは妙な表現であるが）のありようにさまざまな影響をあたえ、地域社会そのものを、帝国化した国家に結びつける役割をはたすものであった。

まず、地方改良運動は、地方団体、またその背後にある地域社会の改善・改良を図ろうとするものであったが、それは、地域社会＝郷土は帝国化した日本という国家の実体的なない手となるという文脈において、“郷土”が国家に従属的に定置されていく一つのかたちであった。

愛媛県温泉郡余土村村長の森恒太郎は、全盲の村長として、また余土村を模範村として発展させることにつとめたことで全国に知られた村長であった。森は、次のように述べている。

町村は、国家を組織するの細胞団にして、細胞団なるが故に町村の実力を増加すれば、従つて国家の実力を増加すべき所以なり。国家と町村とは常にその利害を共にせざるを得ず。此を以て町村の実力養成は独り自町村の幸福たるのみならず、国家も亦其利益を享受すべきものとす\*<sup>8</sup>。

森は、地方改良運動における地方団体の位置づけについての内務官僚の言説をいわばなぞっているが、こうしたフレームのなかで地域社会（それを郷土と呼んでいるかどうかは別として）は、“国家”に直接リンク、あるいは従属させられていく。

また、当然、その背後にある郷土意識も国家にリ

ンクしていくことになるだろう。高木博志や住友陽文\*<sup>9</sup>によれば、地方改良運動と史蹟・名勝の保存・顕彰は密接な関係があった。高木の言葉を借りると、「近代日本における史蹟・名勝の保存がナショナリズムの発揚と深く関わり、日露戦後の地方改良運動の国民教化をはじめとする天皇制イデオロギーの不可分の問題であった〔以下略〕」\*<sup>10</sup>。そして高木は、1897（明治30）年の古社寺保存法の成立以後、1910（明治43）年の地方長官会議での史蹟名勝地保存法案の審議を経て、1919（大正8）年の史蹟名勝天然記念物保存法にいたるまでの過程と、雑誌『史蹟名勝天然記念物』の思潮や奈良県における史蹟保存運動の活動をあきらかにしていく。他方、住友は日露戦後から1920年代における、史蹟顕彰の意味と実態を、国家の側と地域の側の両面から考察している。その場合、とくに地域の側の条件を問題にしたことは大きな意味をもつ（なお、住友の論文にはさまざまな論点の提示があり、きわめて刺激的であるが、残念ながらここでは触れることができない）。この二つの研究は、いずれも1920年代までを対象としており、日露戦後期だけを対象としているわけではない。しかし住友は、日露戦後の史蹟保存が、「地方改良運動の一環として明確に位置づけることができ」\*<sup>11</sup>、かつその内容は、「帝国主義的な体制を支える「愛国心」「郷土愛」をもった国民を創出することがその国民教化の内容であった」\*<sup>12</sup>とする。首肯できる見解である。

だが、地方改良運動における地域の側の意識を考える場合、従来とは異なった要素が登場していることにも注目したい。

具体的には町村是、あるいは町村是調査書の策定・作成に含まれる問題である\*<sup>13</sup>。町村是は、周知のように1890年代から前田正名の提唱により全国的につくられていた。町村是は、文字通り町村発展（より実態に近い言葉でいえば再建）のための方針であり、その前提として町村の実態がさまざまなかたちで調査された。この町村是、正確には町村是調査書とそれ以前の郷土誌との決定的な差は、この町村是調査書が、ひな型をなぞった作文という批判あるものの、単に町村のすがたを認識するということにとどまらず、それをどのように改善していくかという契機をもっているということである。そして、その改善・改良は地域＝郷土のなかで完結するのではなく、国家の“細胞”＝基盤という位置づけで“帝国”へ転化した国家へリンクしていく。この町村是

に示される郷土意識は、地域を多くの場合、どのように経済的に向上させていくかという問題意識にもとづき地域＝郷土のあり方を見直すものであり、それは、本来、直接、国家意識、とくに皇国意識にリンクするものではない。しかし、日露戦争の“勝利”によって日本が「世界の一等国」になり、地方社会がそれを支えるという地方改良運動のイデオロギーのなかでは、少なくとも建前的な論理としては国家意識に連繋していく。ただし、その連繋の構造は、高木博志や住友陽文のあきらかにした天皇制を直截媒介とした連繋のあり方とは異なっている。

## 註

- \*1 高木「「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの—近代における「旧藩」の顕彰」（『歴史評論』第 659 号、2005 年 3 月）3 頁。高木は、また、『近代天皇制の文化史的研究』（校倉書房、1997 年）、『近代天皇制と古都』（岩波書店、2006 年）によって、統合原理としての近代天皇制の文化的価値がどのようなかたちで近代社会のなかで形成されていったかということをあきらかにしてきた。前掲の「「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの—近代における「旧藩」の顕彰」は、それを受けた近代日本のなかのいわば伝統的原理がどのように統合原理となっていくかという問題を発展させていったものと位置づけることができよう。
- \*2 阿部「故井伊直弼を考課する。—直弼五十回忌までの歴史的批評—」（滋賀大学経済学部『彦根論叢』第 371 号、2008 年 3 月）、「故井伊直弼「復権」の文脈 二〇〇七年彦根城築城四百年祭の投機」（『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』第 41 号、2008 年 3 月）。
- \*3 前掲高木「「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの—近代における「旧藩」の顕彰」8～9 頁。
- \*4・5 同前 17 頁。
- \*6 地方改良運動については、1970 年代の宮地正人『日露戦後政治史研究』（1972 年、東京大学出版会）以来、多くの研究蓄積があり、その基本的性格をめぐっての議論もあるがここでは論じない。
- \*7 一例にすぎないが、内務省地方局地方課長や地方局長をつとめ、地方改良運動の実質的なイデオログであった井上友一『自治要義』（博文館、1909 年）では「郷土」は 1 回しか使われず、山崎延吉『農村自治の研究』（愛知県農会所蔵版・永東書店、1908 年）では、3 回出現するに過ぎない。なお、「地方」はそれぞれ、280 回、204 回である（岡田「山崎延吉における農本主義理念展開の場としての“村”“農村”」、安城市歴史博物館『研

究紀要』第 19 号、2012 年 3 月）。

- \*8 森『町村是調査指針』（丁未出版社、1909 年）20 頁。誤解のないように付け加えると、森は余土村という地域の実態をふまえ、さまざまな地域改良を試みていたものであり、その全体像のなかで国家的契機が突出していたということではない。
- \*9 高木「史蹟・名勝の成立」（『日本史研究』第 351 号、1991 年 11 月。なおこの論考は、前掲『近代天皇制の文化史的研究』のなかに組み込まれている）。前掲、住友「史蹟顕彰運動に関する一考察」など。
- \*10 高木同前 64 頁。
- \*11・12 前掲住友「史蹟顕彰運動に関する一考察」96 頁。
- \*13 町村是については太田一郎『地方産業の振興と地域経営』（法政大学出版局、1991 年）が総合的にあつまっている。全国でどのようなかたちで町村是が作成されたかは、一橋大学経済研究所日本経済統計文献センター編『郡是・市町村是資料目録』（同センター、1982 年）で概要をつかむことができる。

## Ⅲ 1920 年代の都市アイデンティティと 30 年代の郷土教育

第一次世界大戦後になると、郷土意識はやや別の展開をしめすことになる。

地方都市や農村社会住民をにない手とする大正デモクラシーの展開のもとでは、地域社会内の政治的矛盾・社会的矛盾が矛盾としてとらえられ、社会運動（一部は階級闘争の運動）というかたちでその解決が図られようとした。それは、典型的には長野県等で展開する村政改革運動、小作争議＝農民運動、青年団自主化運動（そこでの電力料金値下げ運動等）というかたちをとる<sup>\*1</sup>。それらの運動の基底には、地域に対する愛着・愛情がある。しかし、冒頭に述べたように“負”の意識、あるいは批判的な意識は排除され、直接的、直線的な“正”の意識＝“愛情”だけが存在しているのが郷土意識・郷土愛であるとするならば、ましてや国家意識とリンクしていくのが郷土意識・郷土愛であるとするならば、矛盾の存在を認め、予定調和的な世界を壊そうとする、また国家に対して一定の緊張関係をもつ諸運動のなかにある意識に対しては、少なくとも郷土愛という概念は適用できないし、現実にはそういう言葉は使っていないであろう<sup>\*2</sup>。

だがしかし、第一次世界大戦後になるとより近代的な郷土意識・郷土愛のかたちが出現する。たとえば、阿部安成が検討している関東大震災後の横浜市

民のアイデンティティの問題である\*<sup>3</sup>。いわば、“都市アイデンティティ”とでも言える問題である。

明治中期から日清・日露戦争前後の問題として紀年祭の開催についての高木博志の所論は前に紹介した。この阿部があきらかにしている事例は、一面としてはその延長線上にある問題である。すなわちどちらも、その都市住民のアイデンティティの問題であるからである。しかし、横浜においては、横浜という都市としての前身をもたない近代都市という性格を考えれば当然であるが、旧藩意識などといった復古的、封建的な要素との関係においてではアイデンティティは成立しえない。それに対して、阿部は開港＝開国以後の横浜・横浜港のはたした役割の大きさ、言い換えれば、近代国家の形成にはたした横浜の役割のなかに市民のアイデンティティが形成される過程を、おもに1909年の横浜の開港五十年祭と1923年の関東大震災後の復興の過程の二つの局面を中心に描き出している。そして、阿部は、「わたし—横浜市民—日本国民をつらぬくようなアイデンティティ」\*<sup>4</sup>、換言すればナショナリズムに連繫する市民としてのアイデンティティ(阿部の表現を借りると「愛市心」)を問題とし、その意味を検討している。

再度、述べるが、高木博志のあきらかにした事例では、郷土意識・郷土愛は、その都市の封建的、復古的な要素との一体感をもつことによって生成され、かつ国家に連繫していくのに対し、阿部が対象とした横浜市の場合では、国家と一体化した近代的な発展—とくに経済的な発展—のなかに“市民”としてのアイデンティティがもとめられている。つまり、筆者の言葉で言い換えれば、“発展”という近代(また近代日本)のイデオロギー(発展神話!)によって媒介されつつ、かなりストレートに国家に繋がっていくのである。端的に言えば、横浜の発展イコール日本の発展なのである(あるいは、その逆の双方向が考えられる)。そこに「愛国心」に回収される「愛市心」が成立するということであろう。

ただし横浜の事例は、開港—関東大震災という二つの特殊といえれば特殊な契機によって市民のアイデンティティが形成されていくのであり、それは全国の諸都市のなかでどの程度普遍性をもちうるのか、疑問は残る。

その意味で筆者としては、別なかたちの都市アイデンティティにも注目したいと考えている。それは、第一次世界大戦後には、東京・大阪・名古屋等の大

都市だけではなく中小都市にいたるまで、「大東京」「大大阪」「大名古屋」などのように都市に「大」という文字＝理念を冠し、そのことによって都市住民の意識を都市の経済的発展、外形的発展といういわば発展イデオロギーのなかに回収しようという動きが現れたことである。筆者は、愛知県岡崎市と名古屋市を例にこの問題を論じたことがある\*<sup>5</sup>。この問題は、先ほど横浜の場合での使った言葉、発展という近代(また近代日本)のイデオロギーによって媒介されつつ、かなりストレートに国家につながっていくという要素を直截に示すものであり、筆者としては注目しておきたいと考えている。

さらに、以上述べてきたような動きを前提に、1920年代末から30年代、とくに昭和恐慌＝農村恐慌の時期には郷土・郷土愛という言葉が日本の社会のなかに定着したと思われる。

表2 “郷土愛”をタイトルに含む著作

発行年	著者・編者	著作名	発行者
1929年	菅菊太郎講述	地方自治と郷土愛 思想善導	仲野和洋紙店印刷所出版部
1931年	房総文庫刊行会	郷土愛	同会
1932年	大橋良一	郷土愛	秋田郷土研究会

郷土愛をタイトルに含む著作を、表1と同じく国会図書館の検索システムで見ると、表2の三点があるのみである。ここからは、おそらくほとんど何も結論が引き出せないが、それでもこの三点が1920年代末から30年代初頭において出版されたということは、偶然ではないだろう。すなわち、この時期の郷土教育、また1932(昭和7)年に開始される農山漁村経済更生運動のなかでは、それまで以上に郷土の存在が強調されたからである。ちなみに、ふたたび郷土というかたちで一般化すれば、その言葉をタイトルにもつ著作は、1920年代後半から30年代にかけて急増することがわかる。

表3 “郷土”をタイトルに含む著作件数

年	著作件数	年	著作件数
1925年	89	1936年	622
1926年	145	1937年	437
1927年	118	1938年	406
1928年	169	1939年	314
1929年	248	1940年	425
1930年	296	1941年	265
1931年	491	1942年	216
1932年	728	1943年	164
1933年	833	1944年	96
1934年	729	1945年	15
1935年	664		



これは、機械的に郷土という言葉、表1と同様に国会図書館の検索システムで検索した結果に過ぎず、何の操作も加えていない。しかしながら、それでもとくに1930年代前半において、郷土という言葉の著作がかなり膨大に発行されていたことは確実であり、たしかに出版物というレベルの問題であるかもしれないが、この時点で郷土という言葉が定着したと言えるのではないかと考えている。

その場合、これらの著作のなかで大きな比重をしめるのは、郷土教育関係の著作である。

1930年代の郷土教育については、かなりの研究蓄積があり、郷土教育の基本的なかたちはあきらかにされている。ここでは、紙幅の関係もあり教育史研究についての先行研究の整理は行わないが、それについては、現在の郷土教育研究の水準を示すと思われる伊藤純郎『増補 郷土教育運動研究』（2008年）の序章に詳しい。

郷土教育の特徴は、実践的契機をもつことである。郷土教育は、地域＝郷土のあり方を知ること、またそれに愛着をもつことを目的とただけではなく、とくに農村恐慌下の農村部における郷土教育運動には、恐慌下の困難な状況下にある地域社会＝郷土をいかに立て直すかという実践的契機があり、実際にさまざま実践が行われていた<sup>\*6</sup>。

伊藤純郎は、「先行研究は、郷土教育運動を、地域社会の教育とは国家の教育政策が一方的に浸透することで実現するという前提のもとに、国家による民衆教化支配政策の一環としてのみ位置づけ、いわば国家側から把握され郷土教育論を提示しているに過ぎない」<sup>\*7</sup>と述べている。この見解には同感である。しかしながら、そうした地域の側の実態を組み込んでもおかつ郷土教育が郷土を軸に地域社会の統合の論理として、かつ国家へとリンクするものであるという性格は残り、郷土教育の可能性を考えると同時に、社会的統合の論理としての側面をより複合的に見ていく作業も必要だと考えている。

## 注

\*1 これについては、枚挙にいとまがないが、西田美昭編『昭和恐慌下の農村社会運動養蚕地帯における展開と帰結』（御茶の水書房、1978年）、大井隆男『農民自治運動史 転換期の青春群像』（銀河書房、1981年）、大門正克『近代日本と農村社会 農民世界の変容と国家』（日本経済評論社、1994年）をあげておく。

\*2 それに対して体制的秩序維持側での郷土意識にも

変化が現れる。それを、歴史学の立場としてはめずらしく“地域アイデンティティ”という概念を使いながら分析したのが畔上直樹の研究（『「村の鎮守」と戦前日本「国家神道」の地域社会史』2009年、有志舎）である。畔上は、大正デモクラシー期以降の、地域社会における神道（畔上の表現を使えば「村の鎮守」）のあり方を問題にする。1910年代以降、それまで「村の鎮守」のにない手であった神職たちは、あたらしい時代状況のなかで社会に対して積極的コミットしだした。その場合、彼らは地域アイデンティティを軸としつつ社会状況にコミットしていたのであるが、それはファシズムに結びつく新しい宗教ナショナリズムを創出したというものである。これも大正デモクラシー期の地域社会での郷土愛・郷土意識の一つのかたちであり、ここでも郷土愛・郷土意識が国家的な価値と結びついていく。

\*3 阿部「開港五十年と横浜の歴史編纂」（『一橋論叢』1997年2月）、「横浜開港五十年祭の政治文化—都市祭典と歴史意識」（『歴史学研究』第699号、1997年7月）、「横浜の震災復興と歴史意識（1923～32）」（『日本史研究』第428号、1998年4月）等。

\*4 前掲阿部「横浜開港五十年祭の政治文化—都市祭典と歴史意識」17頁。

\*5 岡田「地方中小都市と統合原理としての“城下町”意識—1910～20年代の愛知県岡崎市を例として」（『地方史研究』第277号1999年2月）、岡田「“帝国”体制下の地方都市発展構想—「大名古屋論」をめぐる」（1）（2）（3）（『東海近代史研究』第30号・第31号・第32号、2010年6月・2011年7月・2012年7月）。前者の岡崎の事例は、「大岡崎」という問題と、城下町意識という封建的要素との両者が地方都市に現れることの意味を考察したものである。

\*6 筆者は『大正デモクラシー下の“地域振興” 愛知県碧海郡における非政治・社会運動的改革構想の展開』（不二出版、1998年）や編集委員会『安城市史3 通史編近代』（愛知県安城市、2008年）のなかで愛知県碧海郡の例をあげて論じておいた。

\*7 伊藤『増補 郷土教育運動研究』（思文閣出版、2008年）13頁。

補注 なお、この時期の郷土意識について一つの例を補足しておく。この時代には、いわゆる新民謡運動の流れのなかで多くの新民謡がつくられた。それは、本来は地方の民衆のために現代化された民謡を生み出すという意図のもとでつくられたものであったが、そこではさまざまな郷土像が歌いこまれている。しかし、そこでの郷土像にはさまざまな問題がある。有名な例で言うと中山晋

平作曲・野口雨情作詞「波浮の港」(1928年)の歌詞は、現地をまったく見ないまま作詞された。その結果、西側が山になっており夕日が見えないはずの波浮港に「夕焼け」が見えるような歌詞となった。それでもこの歌は大ヒットした。それは、郷土が、おそらくは商業主義のもとで、美しく懐かしきはあるが実体を離れた幻想・記号となって商品化されて行ったという、この時期の郷土をめぐる状況の一面を示している。

### まとめにかえて―課題の設定

以上、近年までの先行研究に即して、一部は筆者の知見によって補いつつ近代日本の郷土意識のかたちを概観してきた。冒頭で述べたように、郷土意識は、お国自慢にとどまらずさまざまなレベルで社会的政治的統合の論理として展開していった。先行研究は、それらのすがたを具体的にあきらかにしさまざまな論点を提起してきた。

そこで最後に、研究を発展させるためのいくつかの課題について触れておきたい。

まず前提である。多くの先行研究では、また本稿でも“郷土”という言葉を用いてきた。しかし、この郷土という言葉(また郷土意識・郷土愛も)は、自明の概念であるとは言えない。本文で述べたように郷土はある歴史的現象―1890年代の「郷土誌」編集の盛行―に密着して使用され、おそらくは一般化した言葉であり、その点は慎重に検討する必要がある。

以上を前提として言えば、郷土意識は、地域内の意識にとどまらず国家的価値一端的には“愛国心”―とリンクする、その意味で社会的政治的統合の論理であることが指摘されてきた。それは、とりわけ高木博志や住友陽文、あるいは阿部安成の研究にあきらかであった。また、伊藤純郎が批判的に言及した郷土教育についての従来の研究も同様であった。その場合、多くの論者は、日本という国家の契機のうち天皇制との関連でこの問題をとらえてきた。それは正当であろう。ただし、統合原理としての成立の仕方には別の側面もあるのではないかとも思っている。これが第一の論点である。

たとえば地方改良運動においての地域の側―地方名望家層―の問題意識は、地方農村社会の疲弊状態の改善・改良であった。それは、本来は内務官僚たちの意識と全面的に整合するものではなかった。しかし、内務官僚たちは「世界の一等国」を支える地方という枠組みを設定し、地域の側の意識を回収・

統合しようとした。そうした地域の側の意識＝郷土意識の国家への回収・統合のあり方は、阿部安成が問題にした「わたし―横浜市民―日本国民をつらぬくようなアイデンティティ」でも同様であろう。その場合、郷土意識とナショナル・アイデンティティを連節するキーとなるのが“大国”(「世界の一等国」、「大日本帝国」「三大強国」から「GDP世界第二位」にいたるまで)という価値であり、さらにその前提となっているのは、現在にまでつづく“発展”という近代社会のイデオロギーである。さらに言えば、その発展を軸として“大国”のなかに組み込まれた郷土意識は、本来、地方社会の疲弊・衰退の構造的な原因である中央集権性を対象化することなく、各地域は、帝都東京を頂点とする中央集権のピラミッド(このピラミッドは可視的である)の上の位置取りに腐心していくことになる。さらに、それが、他地域への劣等意識とかなり露骨な優越意識が混ざり合った郷土意識を構築させる。この“発展”(あまりに漠然としているが)を軸とした“大国意識”が、郷土意識と国家とのリンクを考える場合、大きな要素ではなかろうか。

第二に、郷土意識と国家とのリンクは大きな論点であるが、反対に地域のなかで郷土意識がどのようなかたちで地域全体の社会統合の論理として構築され、現実の地域社会のなかで機能していくのかという点を、さまざまな局面であきらかにしていかなければならないだろう。一般論として郷土愛・郷土意識は、地域社会のなかの階層的差異を無視して、あるいは政治的主体の形成を展望させないようなかたちで、階級融和的な体制を作り上げていくように機能するものであったと思われるが、現在の段階ではその具体像までは十分に踏み込めていない。

第三に、それとも関係するがかならずしも国家とリンクしない郷土意識・郷土意識のあり方、可能性についても考えていかなければならないだろう\*<sup>1</sup>。柳田国男や新渡戸稲造の地方学の提唱、小田内通敏らの郷土研究会等の地域の状況を客観的に把握していこうという動き(これとても国家とリンクしているという側面はぬぐえないのだが)、あるいは大正デモクラシー期の青年団運動などのなかにある郷土意識などは検討する価値がある。また筆者としては、長野県の中学教員で、『郷土地理の観方―地域性とその認識―』(1931年)を著した三澤勝衛の郷土意識に注目している\*<sup>2</sup>。

以上、三点にわたり述べてきたが、そうした検討

を経ることによって地域社会についての意識の歴史的役割についての議論をより深めることができるのではなかろうか。

#### 註

\*1 この点はたとえば、前掲高木「「郷土愛」と「愛国心」をつなぐもの—近代における「旧藩」の顕彰」18 頁の註 9 にヒントがある。

\*2 同書は、『三澤勝衛著作集 風土の発見と想像』第 1 卷（農山漁村文化協会、2009 年）に収められている。  
（おかだ・ようじ 日本近代地域社会史）

（原稿受理年月日 2012 年 10 月 1 日）